

「本当の創立者は誰でしょう？」

北海道函館聾学校 校長 門 眞 義 弘



函館盲学校と函館聾学校の創立者は、シャーロット・ピンクニー・ドレーパー女史（C.P ドレーパー女史）と認識しておりましたが、こ

の度、函館市文化財課の学芸員（奥野様）に函館中央図書館で資料を調べていただいたところ、残っている一番古い資料として大正4年に出された「私立函館盲啞院要覧」が

出てきました。
大正4年の私立函館盲啞院要覧を見ると、訓盲会の最初は、「マイライネドレパール姉の創立せられしより」「明治二十八年米国の宣教師当時函館駐在ドレパール氏母堂マイライネドレパールは……」となっていました。（※資料を添付）

中根氏が同書で指摘する内容と一致するようです。（※中根伸一著「篠崎清次の足跡をたどって北海道ろう教育の父」（札幌聴力障害者協会、1984））

また、本校の記念誌ではどのようなになっているか見てみると、創立80周年記念誌では創立者を「マイライネ・ドレーパー女史」となっていたものが、創立90周年記念誌では、巻頭言や祝文、沿革で「C・P ドレーパー女史」「シャーロット・ピンクニー・ドレーパー女史」と書いてあります。明らかにこの10年間で認識が変わったものと思われる。

更に調べると、遺愛学院の記念誌の写しには、「…宣教師の息子の妻マイライネ・ドレーパーの働きで函館に横浜と同じ施設を設けた…」と記載があります。

では、現存する横浜訓盲院の沿革はどうなっているか調べますと、明治22年に「アメリカ人ミセスC・P・ドレーパー」により発足と記されています。実際に社会福祉法人横浜訓盲院の施設長の伊藤様に問い合わせたところ、ドレーパー家の家系図（「百年時間」抜粋）他、貴重な資料を提供していただき、正しい情報が判明しました。

本来であれば、90周年記念誌を発行する際に、どうして創立者名が変更になったのかについて記載すべきだったと思いますが後の祭りです。

家系図からは、C.P ドレーパー氏のお子さん（ギデオン・フランク・ドレーパー氏）の配偶者がマイライネ・ドレーパー氏だということがわかりました。ですから、大正4年の「私立函館盲啞院要覧」の記述は誤りであったことが分かったのです。

これらのことから想像すると、横浜訓盲院の設立については「C・P・ドレーパー女史」の意思が強く働いたものであり、同様に「C・P・ドレーパー女史」の意思により函館にも同様の施設を作るようになったが、函館で実質的に働いたのは「息子の妻マイライネ・ドレーパー女史」だったと考えられ、「私立函館盲啞院要覧」の誤記載に気付かず、その要覧などを参考に作られたのが80

周年記念誌であったと考えられました。そうであれば、現在の認識と変わりありません。

令和7年度の創立130周年を前に、現在の認識

を検証できたことはありがたかったですし、このような史実は正確に認識しておく必要があると改めて考えている次第です。

調月十年四正大

私立函館盲啞院沿革 要覽

目次
沿革
大正四年度歳草
入出豫算表
盲啞院一覽
金品寄附
附後援會記事

私立函館盲啞院沿革

函館盲啞院は明治二十八年マイライネドレパール姉の創立せられしより本年を以て二十一年の霜星を経たり今其間の沿革大畧を報すれば次ぎの如し
明治二十八年米國の宣教師當時函館駐在ドレパール氏母堂マイライネドレパールは當時盲人状態を目撃して深く其境遇に同情し私財を以て區内青柳町五十二番地（今の住吉學校向ひ）に一つの教場を設け函館訓盲會と名け盲人に点字按摩を教授せり時に盲人の教育に従事するもの全國を通じて五ヶ所のみにして東京以北唯一の教場たり然して此の機關を通じて區内の盲人中点字を習得せるもの多く点字の普及上に大いなる効果を顯したり
明治三十四年ドレパール姉は子息の轉任と共に當地を移轉せらるゝ事となり姉は米國在住の匿名婦人團に其經營を托せられ同時に會名を變更して函館訓盲院と稱しワドマン氏院長となれり時に教師たりし者は大嶋經男鈴木たま中嶋健次郎篠崎清次なり
明治三十五年篠崎清次氏は相談の結果訓盲院内に啞生部を置き啞生二名を教授せり是れ本道に於て公けに雙啞教育を行へる始めなり
明治三十六年盲啞教育研究の爲め教師篠崎氏は東京盲啞學校に六ヶ月間出張授業の實際を習得し歸函す此の年教員大嶋經男氏辭任せられ英語學校に轉せらる
明治三十七年ワドマン氏歸米と共に中嶋健次郎氏職を辭し篠崎清次院長となり院凡ての事

私立函館盲啞院
函館區沙見町三十一番地

【資料七-(イ)】

ドレーパー家の系図

